

8. コロンビアへ！教への伝播 1「コロンビアとバナナ」

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアのイメージがおおよそ掴めて、「あんなのことも大体わかったワ」というところで「締め」として、今回からは天理教の伝道のことを含め、個人的な意見も交えて書いてみたい。

太田哲三氏は『コロンビアの日々』で、こう書いている。

1954（昭和29）年コロンビアと日本の国交が回復し、戦後初代の日本全権大使となった土屋氏に、コロンビアへの日本人移住の話が持ちかけられた。コロンビア在住のアメリカ人農場主が、トゥマコにあるバナナ園を売りたいというものであった。土屋氏は、日コ友好のためにもと、この話に賛同し、早速調査を開始し、また出資者を探しにとりかかった。⁽¹⁾

これが話の発端である。私は次々と疑問が湧いてきた。「なぜこの地コロンビアのエクアドルとの国境（トゥマコ）にバナナ園を開拓するのか？」「なぜこの時期なのか？」「なぜ天理青年なのか？」

世界のバナナ栽培の今昔とコロンビア

2021年のデータによれば、バナナの生産量はインド、中国、インドネシア、ブラジル、エクアドルの順である。コロンビアの生産量は世界で12位だが、輸出量では世界第5位。一方隣国エクアドルの生産量は世界5位だが輸出量は世界第1位である。また、コロンビアは年間生産量の約93%が海外市場に輸出され、その50%が欧米向けだという。

コロンビアのバナナ産業で欠かせないのが「ユナイテッド・フルーツ・カンパニー」（略してUFC）、現在のチキータ・インターナショナルである。もともと米国資本のこの企業は1870年に創立以来、中南米諸国のトロピカルフルーツを手がけてきた。コロンビアでもバナナの収穫が増えてきていたが、この会社は米国の独占禁止法の影響で、1960年には中米やカリブの大農場主に売却された。

久保俊之前コロンビア出張所長による資料（コロンビア50年伝道史⁽¹⁾）では、ちょうど1960年頃の記述で、トゥマコバナナ園開拓事業責任者である富谷政明氏が登場する。

富谷氏がボゴタ市に滞在していた頃、現地のある知人から「エクアドルとの国境にある半未開のバナナ園の共同事業（出資）者を求めている」との情報を得たのは1960年の初頭であった。

そこで、このトゥマコ開拓事業が進む。

現地から僅か50キロメートル南にあるエクアドルのエスメラルダ地区から輸出されているバナナは、すでに日本では有名であった。富谷氏は、赤道直下の熱帯雨林であるという同じ気候条件の1,500ヘクタールの土地は、植え付けされている250ヘクタールのバナナ園の地質と同じであり、栽培可能であると判断した。そして「戦後の日本人の移住事業」に繋がるのではないかと考え、具体的なバナナ園開拓（日本人移住）計画をたてた。

これが後に天理教の関わる「トゥマコバナナ園開拓事業」の起りである。

日本人がエクアドルのバナナ産業に参入したことは、この場所にこの時期ということが一致し、はじめて理解できると思われる。コロンビアにおけるバナナ産業の問題と歴史的な悲劇事件

コロンビアのバナナ事情には特筆すべき事柄が一つある。残念ながらネガティブな歴史である。この機会に整理したいと思う。



UFCがコロンビアで事業を開始した頃（1890年頃）の写真⁽⁴⁾

それは、「バナナ労働者の殺戮」と訳しておくが、1928年12月に起こった惨殺事件である。⁽³⁾ 概略を記すと「12月5・6日にマグダレーナ県シエナガ地区で起こった労働者の大量殺戮」であるが、背景には、コロンビア国家と軍隊の存在がある。

当時、UFCはコロンビアのバナナ産業の主力であった。この会社の労働者が労働条件の改善を主張し、労働交渉を行ったところ、会社側が拒否し、ストが長引いた結果、軍隊（国）が介入し、同胞であるコロンビア人労働者及びその家族を殺戮した事件である。この事件の詳細は次の通りである。

事件の1カ月前、労働者は組合を通して、会社側に労働の改善を要求していた。しかし、UFCは下請け業者を利用して責任を回避し続けた。労働者は過酷な状況で暮らしていた。病気で苦しみ、病院や衛生関係のアクセスもなく、飢えに苦しみ、子供達は教育も受けられず、何の権利もなかった。ストライキを起こした労働者は、労働保険の支払い、危険手当、休日の確保、住居や病院施設の充実などを保障するように会社に要求したが、交渉は拒否され、ストライキはますます拡大した。

そして、12月6日の殺戮にいたったのである。労働者やその家族らは、軍隊といえども同胞のコロンビア人である。兵士が発砲するなど考えてもいなかったという。「兵士もストライキに参加せよ、私たちは兄弟だ、ユナイテッドを倒せ」などの人々の声もむなしく、指揮官は「撃て」と発砲の命令をくださった。

このバナナ労働者殺戮事件は衝撃を社会に与えた。この後、1930年代にUFCは急成長を遂げる。カリブ諸国、中米の9カ国でプランテーション経営をしており、UFCは1933年には全体の約64%のバナナの輸出を担っていたのである。

[註]

- (1) 太田哲三『コロンビアの日々』（天理大学出版部、1988年）、3頁。
- (2) 東京に本社を置く「共栄貿易会社」の富谷政明社長。富谷氏は日本とコロンビアの国交が回復されるや直ちにコロンビアのコーヒー買い付けのためボゴタ市に事務所を構え、苦心の末、コロンビア・コーヒーを初めて日本に輸出することに成功した。
- (3) <https://repositorio.unal.edu.co/bitstream/handle/unal/32395/19092-62543-1-PB.pdf?sequence=1&isAllowed=y> "LA UNITED FRUIT COMPANY EN COLOMBIA".
- (4) <https://www.las2orillas.co/la-masacre-de-las-bananeras-y-otras-atrocidades-de-la-united-fruit-company/>